

○三枝大樹・北崎康生

(宮崎総農試)

【目的】

前報では普通期水稻「おてんとそだち」の移植時期及び栽植密度等について検討し、6月上旬までの早植えにおいて多収でタンパク含有率の増加が無く、品質低下が小さいこと、極端な疎植は減収するため避けることについて報告した。

本報では、早植えにおける「おてんとそだち」の収量・品質面からの収穫適期について検討した。

【材料および方法】

試験は2012～2013年に宮崎県総合農業試験場(宮崎市佐土原町)で実施した。

1) 栽植密度による影響の確認(試験1)

密植、標準、疎植の3水準を設け、出穂後28日程度から2～3日おきに収穫を実施し、収量及び品質等を比較した(図1, 表1)。

2) 収穫期による品質への影響の確認(試験2)

上記の標準植の収穫期別に、品質等を比較した(図2)。

【結果および考察】

1) 栽植密度による影響(試験1)

精玄米重は、各栽植密度別の二次回帰曲線より出穂日からの積算平均気温1100℃がピークと考えられた。また密植の回帰式は傾きが緩やかでピークの幅が広く、疎植の回帰式は標準植と相似であるが、相関がやや低く、変動が大きいと考えられた(図1)。

また、他の要素について収穫時期及び栽植密度との影響について比較したが、栽植密度と有意差が見られたのは、千粒重と玄米タンパク含有率で、それ以外の項目では相互作用の影響が強く判然としなかった(表1)。

2) 収穫期による品質への影響(試験2)

上記試験より、標準植に絞って品質への影響を確認した。検査等級は出穂日からの積算平均気温との相関は低いが、ほぼ全体が1等(1～3.5)の範囲内となった(データ省略)。

また、整粒歩合及び未熟粒歩合は出穂日からの積算平均気温と高い相関が見られ、出穂日からの積算平均気温が1100℃付近で整粒歩合がピーク

になった(図2)。

被害粒・着色粒歩合は、出穂日からの積算平均気温が1000℃から徐々に増加した(データ省略)。

以上のことから、「おてんとそだち」の6月上旬移植の収穫適期は、出穂日からの積算平均気温が1100℃と推定され、多収で整粒歩合が高く、品質低下も小さいと考えられた。また、栽植密度による収穫時期への影響は小さく、疎植は千粒重が低下し、収量が年次間差を受けやすくなるリスクがあると考えられた。

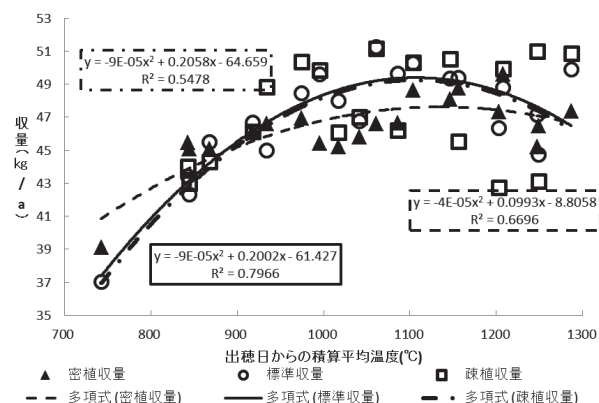


図1. 栽植密度別の収穫期別収量(2012～13年)(試験1)

表1. 収穫期別の各要素と栽植密度の関係

収穫時期	栽植密度	精玄米重 (kg/a)	くず米重 (kg/a)	千粒重 (g)	検査等級	整粒歩合 (%)	タンパク含有率 (%)
A	B						
出穂日からの積算平均気温	**	**	**	**	**	**	**
	n. s.	**	**	**	**	**	*
密植	46.3	1.6	22.1a	2.6	73.9	5.6a	
標準	47.0	2.0	21.6b	2.4	69.5	5.6ab	
疎植	46.8	3.2	21.3c	2.9	69.8	5.5b	
年次間差	**	**	**	**	**	**	**
A×B	**	**	n. s.	**	**	**	n. s.

※\*, \*\*はそれぞれ5%, 1%水準で有意を表す。異符号間は5%水準で有意差あり(Tukey法)。※精玄米重は篩1.8mm。検査等級は1(1上)～9(3下)。

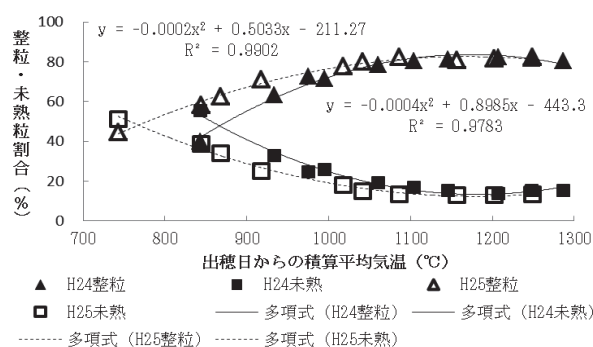


図2. 収穫期別の整粒及び未熟粒等割合(2013年)(試験2)